

意思決定の脳メカニズム
- 顕在的判断と潜在的判断 -
玉川大学脳科学研究所
坂上雅道

近年の脳科学研究の進歩は、ヒトの複雑で豊かな心の理解に迫ろうとしている。ただ、これまでの脳科学研究は、医学・生物学の枠組のなかでのものが中心であった。しかし、ヒトが作り出す社会や文化も脳の活動の結果である。今、欧米では神経経済学、神経倫理学といった脳科学と人文・社会科学が結びついた新しい学際的脳科学研究が興隆をみせている。我々も脳科学の視点から社会や文化、それにこれらを支える制度について研究・議論することを急がなければならない。

しかし、同時に、脳科学研究の結果を拙速に制度設計に反映させることはあってはならない。中途半端な理解は過ちにつながるし、そもそも我々の社会制度は科学的事実だけに依拠するものではない。脳科学的な事実は我々の社会と制度を議論する上で極めて有用な材料となるが、社会制度は人類の長い歴史の上で蓄積されてきた経験と知識に裏打ちされるものであるし、多くの人々の共通理解の上に成り立っている。ただ、人文社会科学と脳科学を融合させた新しいヒトと社会に関する科学の発展は急がなくてならない。欧米では、これまでの「常識」とは異なる私たち自身に関する新しい事実が、新しい脳科学研究によって明らかにされつつある。

ここでは、意思決定に関する脳科学研究の例を示すことにより、新しい人間観・新しい社会観の形成に脳科学がどのように貢献できるかを考えてみる。特に、我々の意思決定の多くが、潜在（無意識）的プロセスによって担われているかもしれないという最近の研究結果は、個人の判断の意識性を前提とした現代社会の諸制度にどのような影響をもたらすのであろうか。関連する脳科学研究の最新の成果を紹介する。